

福神山間歩

福神山は、取り出された銀の量に関していえば、石見銀山で最も優秀な坑道の 1 つです。間歩は 3 つの坑道で構成され、2 本は互いに接続され、銀山川の下を通過して鉱山の中心地である仙ノ山へと続き、そのすぐ上を一本の排気坑が通っています。福神山間歩は、石見銀山で唯一、年間を通して公開されている龍源寺間歩へと至る道路沿いに位置しており、中に入ることはできませんが、別の理由から注目に値します。なぜなら、その歴史は、1700 年代に生産量が減少し始めてから、同銀山における所有と管理のパターンがどのように変化したかを示しているからです。

この坑道は、独立の山師によって掘られました。山師は場所を決め、鉱山を管理する代官所から採掘の許可を得て、プロジェクトの資金調達は自分で行います。代官に対して、求められた量の銀を上納する能力を証明すると、坑道に対する財産権が付与されます。この仕組みは、銀山が繁栄し、メンテナンスに相当な投資が必要であるにもかかわらず、坑道の所有者が利益を上げることができた 1600 年代において一般的でした。ところが、1700 年代までには、到達可能な銀鉱床がほぼ枯渇し、採算性は低下します。福神山間歩を含め、まだ採算性があると考えられた坑道の多くは、公金を使って代官所が取得し、この資金は坑道の経営資金としても使われました。この鉱山の部分的な「国営化」は、銀の生産量増加を目的とするさまざまな工業事業と併せて実施されましたが、結局は石見銀山のかつての繁栄を取り戻すことはできませんでした。